

令和7年度 江戸川区立清新小第一学校 学校関係者評価報告書（学校経営計画・学校関係者評価シート）

学校教育目標	「体をきたえる子」 「最後までやりぬく子」	「思いやりのある子」※重点 「進んで学習する子」	目指す学校像 目指す児童像 目指す教師像	・保護者・地域から信頼され、共に歩む学校、「チーム清新一校」による落ち着いた学校 ・体をきたえる子、思いやりのある子、最後までやりぬく子、進んで学習する子 ・児童のよさや可能性を信じ、温かさとしさを兼ね備え、柔軟に対応できる教師 ・学校経営に参画意欲を持ち、他者と協働し、学校課題の解決に励む教師
前年度までの本校の現状	成果	児童は落ち着いて学習することができた。昼の時間に新たに算数学習の時間を設け、学習カルテを活用し、取り組むことができた。ICTを活用し、一人一台端末を授業の中で、効果的に活用することができた。	課題	児童の体力向上を目指し、継続的な運動遊びを計画したが、天候に対応可能な計画となっていなかったため、実施できないこともあり、児童の運動機会の確保には不十分であった。学校図書館の整備を進めたが、バーコード化が令和7年度9月に終了の予定である。校内研究では国語科物語文の読み深めを研究してきたが、読み深めたことを伝え合う活動につなげる必要が見られた。授業における児童のタブレットの有効活用を更に模索する必要がある。

重点	取組項目	具体的な取組内容	数値目標	達成度		「中間」自己（学校）評価(A~D)		「中間」学校関係者評価(A~D)		「年度末」自己（学校）評価(A~D)		「年度末」学校関係者評価(A~D)		次年度に向けた改善案
				9月	2月	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント			
学力の向上	○授業改善の推進、学習の基盤となる基礎・基本の確実な習得、家庭学習習慣に対する学校の組織的な対応による取組の実施・充実	・学校と民間事業者による放課後補習教室の実施	・放課後補習教室に登録した児童の参加率90%以上	75	80	B	学習の積み残しのある児童への手立てが必要である。放課後学習教室参加児童の学力定着度を図っていく。	B	学習の積み残しがないように、学習が分からないときに教員に聞きにいける時間的余裕が必要ではないか。	C	登録児童の出席率は約80%であり目標達成に至らなかった。対象児童のつまずきと連動する取組が必要である。	B	教員の時間的余裕を少しでも生み出し、児童と関われる時間を確保し、個々の力を伸ばしていただきたい。	放課後学習教室の担当に個別に適應した指導となるように定期的な打合せを実施する。
	○読書科の更なる充実	・朝読書やよむYOMUワークシート、探究的な学習の実施	・全国学力・学習状況調査の正答率、全国平均比較5ポイント以上	100	100	B	全国比17ポイント以上で目標は達成。第5・6学年の算数科習熟度別学習が実施に向けた取組が必要である。	B	算数科の習熟度別学習の実施に向け、教員を確保しないとけない。	B	区学力調査も全学年で全国平均を5ポイント以上上回った。5・6年生の算数科習熟度別学習を再開できなかった。	B	教員が休んでもすぐに補充できる仕組みを区にも要望し、整えてほしい。	算数科習熟度別学習を確実に実施できる体制を構築する。
	○読書科の更なる充実	・朝読書やよむYOMUワークシート、探究的な学習の実施	・朝読書実施100% ・意識調査における探究的な学びの肯定的回答90%以上	75	70	B	よむYOMUの内容への助言、探究的な学びの取組の推進が必要である。朝読書の実施率を100%にする。	C	文章題の苦手さがあるのではないか。読書習慣をつけた方がよい。朗読させるのも一つの方法である。	C	校内研究で読むことの手を伸ばして取組んだ。朝読書は実施したが、探究的な学びを再構築する必要がある。	C	読書に親しませることは児童の心を豊かにする上でも大切である。探究的な学びはこれからの学びに必要である。	探究的な学習を校内研究の中心に据える。総合的な学習の時間の計画を見直す。
体力の向上	○個に応じた体力向上のための取組の実施・充実	・年間を通して運動遊びに取組み、外遊びの習慣化 ・運動に取り組むための仕掛けづくり	・意識調査において、運動やスポーツをすることが好きな肯定的回答90%以上	100	85	C	外遊びの習慣化、児童による偏りは課題である。運動に取り組むための仕掛けづくりが必要である。	C	運動へのしかけを考えていただきたい。	C	意識調査で運動やスポーツが好きは90%から8ポイント減少。日常的な運動遊びの仕掛けは十分にできなかった。	C	児童が運動遊びをしなくなる環境を整えることは必要である。	日常的な運動遊びの仕掛けとなるよう運動用具等を休み時間に活用できるようにする。
	○運動意欲や基礎体力の向上	・学期1回のなわ跳び週間、12月の持久走記録会に向けた練習期間の設定	・なわ跳びコンテストへの参加率80%以上 ・持久走記録会への肯定的取組80%以上	-	80	B	年間を通じた取組みでないため、意識付けが難しい。2学期以降の取組にめあてをもって臨ませる。	B	目標を持つことは大切である。	B	なわとび週間や持久走記録会に向けて練習カードを工夫し、めあてをもって取組むように変更した。	B	何のために取組んでいるのかを理解させ、引き続きめあてをもって取り組めるようにしてほしい。	各取組にめあてをもたせる。持久走記録会を体育と連動させ、校内での取組みとする。
教育の推進 共生社会の実現に向けた	○ユニバーサルデザインの視点を取り入れた個に応じた指導の実施・充実	・特別支援教育コーディネーターを中心とした校内委員会の実施及び各通級指導学級教員との連携	・支援が必要な児童へのニーズに応じた連携支援90%以上	95	95	A	必要に応じた連携がとれている。	A	連携が取れていることはよい。	A	校内委員会を確実に実施するとともに関係教員間での連携は行った。	A	支援が必要な児童には家庭と連携し、早期からの支援を行ってほしい。	早期の支援につなげられるよう情報共有を図る。
	○エンカレッジルームの活用促進	・エンカレッジルームの活用及び当番制による教員の対応	・エンカレッジルームの解放率100%	75	80	B	よい制度であるが、担当教員が入れない場合、誰が担当するのかのルールを決めていく。	B	自己評価のようにルールは決められた方がよい。	B	エンカレッジルームを解放したが、支援が十分とは言えない面があった。	B	ルールを決め直すとともに、人を常時配置するなどの要望を区にも上げてほしい。	エンカレッジルームが教室に入る前の居場所となるように担当等の役割を見直す。
	○副籍交流、交流及び共同学習の実施充実	・事前打合せ及び年間3回の直接交流及び共同学習の実施	・副籍児童の満足度90%以上	-	90	C	1学期は交流準備の打合せのみであった。次年度に向け、1学期からどのような交流ができるか検討していく。	C	様々な児童と関わることは大切である。	B	在籍校との打合せに基づき、計画的に実施した。	B	様々な人がいることを知り、様々な人と関わる機会を大切にしてほしい。	副籍交流は早期からの打合せを行う。
不登校・いじめ対応の充実	○豊かな心の育成	・年3回のいじめ未然防止に向けた授業 ・学級活動や委員会活動、異学年交流などの充実	・意識調査における人助け及びいじめに関連する項目の肯定的割合95%以上	85	60	B	いじめに関する授業は実施。時期は4月など新学年の早い段階で、いじめは許されないことを徹底したほうがよい。	B	児童によっては、いじめと変わらないこともあるのではないか。いじめが許されないことは徹底したほうがよい。	C	いじめ防止の授業及び教員研修は確実に実施した。異学年交流は仕組みから考えていく必要がある。	B	いじめは決して許されないことの指導を引き続き徹底してほしい。異学年交流は大切にしていたほしい。	4月にいじめ防止の指導、6・10・2月にいじめに関する授業を実施する。
	○OL-Gateの活用	・毎日のL-Gateの実施と結果に基づく児童面談	・いじめ解消率100% ・意識調査における児童が学校で相談できる割合80%	60	60	C	L-Gateの開始時期が遅れ、習慣化ができていない。児童の心理的変容の活用方法の検討が必要である。	C	児童の心をつかむ取組はよい。活用して児童の心の変化を把握してほしい。	C	L-Gateは入力する時間の確保が優先となり、活用について十分に検討するに至らなかった。	C	児童の心の変化を把握するために、有効活用してほしい。	1日の終わりのL-Gateの確実な入力と学年で共有し、生活指導部に報告する。
	○教育相談の強化	・SC、SSW、教育相談等の関係機関との連携強化	・不登校児童とのSC、SSW、関係機関との連携率100%	80	90	B	SCやSSWなど児童や保護者の困り感に応じて連携できた担当が抱えてしまわないように早めに連携をしていく。	B	連携できていることはよい。	B	SCやSSW、ステップサポーターなどを活用するとともに、必要な児童への働きかけが継続的にできた。	B	引き続き、不登校や悩みを抱えている児童をチームで対応してほしい。	引き続き充実を図る。

学校（園）の 開かれた 地域の 実現	○学校（園）ホームページの充実等	・学校ホームページの更新及び内容の充実	・毎日更新を行う	85	90	B	充実しているとは言い難い。学級TeamsとHPとの切り分けを考えていく。HPの更新への教員が関わりが弱い。	B	tetoruなど、直接保護者に届く仕組みを活用してほしい。HPは教員も関わってほしい。	B	できる限りの発信は行ってきた。学年からの直接的な発信などの仕組みづくりに課題がある。	B	HPのみならず、保護者がどこでも情報を確認できるのはよい。教員の負担になり過ぎないようにしてほしい。	HPは、学年及び担当分掌業務で発信する仕組みとtetoru発信を充実する。
	○学校関係者評価の充実	・児童、保護者、地域、教職員へのアンケート調査の実施	・各学期に1回実施	80	90	B	現在、保護者アンケートが紙媒体であるがWebでの実施を予定。児童へは教育活動に連動するように検討中。	B	Webへの変更はよい。	B	学校評価に関わる保護者アンケートは前年度と同様にWebとし、学校公開等のアンケートもWebに変更した。	B	デジタル化を進めてよい。	tetoruを活用して情報発信し、webでのアンケート調査とする。
教育の 特色ある 展開	○働き方改革の推進	・月2回の定時退勤日の設定及び午後出張終了後の直帰の徹底	・全教職員の月残業時間55時間以下	66	60	C	定時退勤日に退勤できていない。教員の意識改革だけではこれ以上の働き方改革は望めない。	C	先生たちに余裕がない現状もある。	C	残業時間の見える化により、個々の教職員に管理職から声掛け等を行ったが、残業時間の削減には至らなかった。	C	先生でなくてもできることは外部に委託したり、協力を仰いだりして、先生に余裕をもたせたい。	校務分掌、会議実施曜日や内容を変更する。教師が取り組むべきことを集中する。
	○教員研修の実施	・教員の組織的な育成	・全教員年2回の授業公開	-	100	B	管理職による授業観察は実施し、他の教員も参観している。若手教員への指導が十分とは言えない状況もある。	B	引き続き取組をしてもらいたい。	B	全教員年2回以上の授業公開を行い、若手教員の研修も計画的に行った。引き続き授業の質を高めていく。	B	引き続き研鑽し、教員としての力量を高め、児童に授業で還元していただきたい。	2系統あった若手研修を一本化する。授業公開は引き続き実施する。